ロダン「青銅時代」
1925年寄贈

東京美術学校1923年

関東大震災
——時代をかえた9月1日

佐藤道信
日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生－近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術－美の政治学』

その日、朝からの雨もあがり、上野の杜は穏やかな秋の日を迎えていた。竹の台陳列館では、院展も開幕し、横山大観の「生々流転」が話題をさらおうとしていた。でも学校はまだ夏休み。閑散としたいつもの昼を迎えようとしていたその時、時代を変える大地震がおこった。九月一日午前十一時五十八分。幸い学校の建物に大きな被害はなかったが、上野公園は時間とともに下谷、浅草、神田、本所、深川、日本橋など、被害の大きかった地域からの避難地として、五十万ともいう人々であふれ返っていった。校内も一時、一万人以上の人で身動きもとれなかったらしい。

鈴木信一は、その対応に獅子奮迅の働きをした。教務掛主任で校内に住んでいた彼の奮闘は、「震災日記」（校友会月報 二三―五）に詳しい。人々が、まず求めたのは飲み水。校内の二つの古井戸を使った。しかし最大の脅威は火事。東京から立ちのぼる煙は、遠く高崎からも見えたという。翌二日夜、風向きが変わり、松坂屋を焼いた炎が上野の杜に迫ると、人々は火のなかった谷中から田端方面へと避難した。降り注ぐ火の粉の中を大移動する人々の阿鼻叫喚は、さながら地獄絵巻のようだったという。鈴木らは、必死に校舎を火の粉から守った。類焼をまぬがれた校内に残ったのは、千人あまり。食糧難、病気と続いた困難を経て、授業が再開されたのは、二ヵ月後の十一月一日だった。

しかし大災害の時には、奇妙な精神的トランスもおこるらしい。校友会月報の同じ号にのった「震災漫画記」は、意図的にか拍子ぬけするほど明るい。描いたのは学生の安本亮一。彼自身、焼け出されて、学校で被災者の救援にあたっていた。また朝倉文夫は、粉々になったロダンの石膏像「青銅時代」を完全に修復した。この像は、デルスニスが学生・教官の研究のため、一年間美校に預けていたものだった。朝倉は、この修復で逆にロダンの技法を十分に研究できたと、のちのち語っていた。地震の話をフランスできいたデルスニスは、二年後あらためて今度はブロンズ像を寄贈する。いまも正木記念館と旧芸術資料館の内庭にある像である。

この大地震を機に、日本は右傾化していくのだが、美校の自由と明るさは、不思議なほど変わらず、その後もしばらく続いたらしい。治安維持法が公布された一九二五年からは、軍事教練が始まった。まるで美校生をさしたかのような「現代の青年が一般に芸術を愛し、文弱に流れつつある」傾向の矯正と、「健全なる生活」がめざされた。文部省の「体育デー」に従い、翌二六年には運動会が、また二七年からは野外演習も始まっている。しかし当初、教官も無理強いはしなかったらしく、学生は教練には下駄や草履でバラバラの服装、野外演習も体育や遠足気分で結構楽しんでいたらしい。当時の時勢からすれば目くじらものだろうが、今から見ればむしろこっちの方が健全にも見える。ひいき目だろうか。

（さとう・どうしん／美術学部芸術学科助教授）

震災漫画記「正木校長先生、鈴川先生親子対面を見て涕泣の事」

震災漫画記「避難者に水接待の事」

震災漫画記「校内慰問袋配給の事」

1923

タイムカプセルに乗っ

1924

近年は年末になると、「第九」公演が日本各地で年中行事のように行われている。そのベートーヴェンの交響曲第九番全四楽章が日本で初めて演奏されたのは、一九二四年（大正十三）十一月二十九日と三十日である。東京音楽学校第四十八回定期演奏会においてであった。両日とも大盛況で、一週間後の十二月六日には追加公演の運びとなった。これまた満員であった。指揮はドイツ人のグスタフ・クローン。お雇い外国人教師としての十二年間の在職中に、彼はベートーヴェンの九つある交響曲のうち、六曲の本邦初演を手がけた。「第九」初演は、クローンの日本における総仕上げ的仕事であった。

初日の十一月二十九日の聴衆の中には、物理学者の寺田寅彦（一八七八―一九三五）もいた。彼こそ、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』に出てくる洋楽好きの理学士、水島寒月のモデルである。寅彦はいろいろな楽器を嗜んだ。なかでも高校時代に始めたヴァイオリンは、東京帝大の物理学教授となった後も独学で続け、四十四歳からは、《叱られて》や《靴が鳴る》の作曲者として有名な音楽学校教授、弘田竜太郎（一八九二―一九五二）に師事して基礎から学び直すほどの徹底ぶりであった。「第九」の記念碑的な初演にあたっても、寅彦は事前にスコアを買い込み、レコードに合わせて「タクトを振りながら」念入りに予習した。SP盤で十数枚になる「第九」は、蓄音機で聴くだけでも大仕事である。

夏目漱石は英国留学から帰った明治三十年代後半、洋楽フリークの寅彦に連れられてしばしば楽楽堂に通った。その漱石も大正五年に他界しており、寅彦は自分と同じ漱石門下の親友、小宮豊隆を「第九シンホニーへ行く気はありませんか」と、まず十一月十八日づけの葉書で誘った。その数日後にはチケットを同封して、「椅子の番号がH120というように並びになつて居るから、別々に行っても一処になれます。併し何なら一時に地震学教室迄御誘ひ被下ばそれから上野迄一処にあるいても結構と存じます」と、手紙を送った。さらに演奏会前日の二十八日にも、小宮に宛て、「娘の嫁入も大事だがおやぢの内部生活も大事だから万障繰合せ、昼食位は楽権しても第9ジュンホニーだけは出席致度存じます」と、一筆したためている。実は、寺田家では三十日に長女貞子の結婚式を控えていて、その準備に何かと忙しかったのだが、寅彦は自分自身の「内部生活」を優先させた。

クローン指揮のライヴ公演を見て、寅彦はひとかたならず感動したようだ。彼の興奮は一カ月以上経っても醒めなかった。日記によると、大晦日には朝から、新しく買った指揮棒を振りながら、またも「第九」のレコードをかけている。そしてその使い勝手として、「棒が長いだけに、expressionのamplitudeが大きい」と記しているのは、いかにも物理学者らしい。

東京音楽学校では一九二四年四月の新学期早々、教官と学生が総出で「第九」の猛練習を始めた。彼ら演奏家たちは七カ月以上にわたって努力に努力を重ねたが、寺田寅彦の例にみるように、それに見合うだけの周到な予習と復習をした聴衆もいたのである。

（たきい・けいこ／演奏芸術センター助手）

東京音楽学校1924年

ベートーヴェン「第九」の本邦初演

瀧井敬子

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点－音楽におけるジャポニスムの一断面」

左：クローン指揮の東京音楽学校管弦楽団と合唱団
上：寺田寅彦（1920年頃の自画像）
右：小宮豊隆宛の1924年11月18日付けの絵葉書